

## 選評

礪谷有亮

一九三〇年代のフランスにおける写真の位相

—グラフィックアート誌『アール・ゼ・メティエ・グラフィック』を中心に—

本論文は、両世界大戦間期のフランスを代表するグラフィックアート誌『アール・ゼ・メティエ・グラフィック』（1927-1939、以下『AMG』）が1930年から1939年まで刊行した『フォトグラフィ』の検討を通じて、従来のモダニズム的な動向を中心とする進歩史的な写真研究においては等閑に付されてきた「写真の保守化」を再検討する意欲的な論考である。礪谷氏は、『AMG』の活動および『フォトグラフィ』を、1930年代のフランスにおける写真の展開の核心に位置づける。そのうえで、モダニズム写真の典型的な作例をまとめて紹介し、フランス写真界に衝撃を与えた最初の出版物であった『フォトグラフィ』が、1930年代半ばから保守中道的な傾向とモダニズム的な写真の手法の双方を含む、より折衷的な方向に転換することに注目する。

従来、同時期の保守的な写真の増加は、戦間期フランスにおけるナショナリズムの高まりをうけた古典主義の復活、いわゆる「秩序への回帰」のあらわれとして図式的に理解されてきた。それにたいし礪谷氏は、政治社会状況をめぐる文脈主義的考察だけでは見落とされてきた点を鋭く指摘する。すなわち、1930年代半ばに『AMG』周辺の言説にあらわれるモダニズム写真批判の背景には、マスメディアと結びついて爆発的に普及したモダニズム写真の手法の陳腐化があり、そうした写真の卑俗化とメディアへの依存への抵抗として、質的洗練や自律した「作品」への志向があらわれたという。本論における個々の写真作品の的確な分析と、関連する批評言説の入念な検討は、美術史研究の手法として手堅く、論旨の明確さと行論の完成度の高さに結びついている。また、『フォトグラフィ一九三五』（1934年刊行）のカバーデザインに着目した写真の扱いの変化に関する指摘も、氏の目配りの周到さを示している。

さらに礪谷氏は、『フォトグラフィ一九三五』にソフトフォーカスやソラリゼーションなど、多種多様な様式と表現による作品が混在していたことについて、上述のモダニズム写真批判の要点があくまでその技法の濫用と質の低下にあり、技法そのものの否定ではなかったこと、ゆえにこうした多様な写真の技法の併存は、それらの技法が元々有していた意味やイデオロギーと切り離された写真の「マネリスム」的傾向であると分析を進める。モダニズムから古典主義への回帰という単線的な議論を超えて、当時の写真をめぐる複雑な状況を捉えた重要な指摘である。

1930年代半ばのフランスにおける写真の芸術性や作家性、「マネリスム」的現象については、『AMG』や『フォトグラフィ』のみならず、同時期のより広範な問題系のなかで更に考察される必要があるだろう。そうであればこそ、今後の写真研究において、参照されるべき知見と問題提起を備えた本論文の重要性はより高まっていくと思われる。「むすび」に述べられる通り、本論文を出発点として更なる事例研究が積み重ねられることによって、より鮮明な写真史の理解が得られるだろう。

以上により、礪谷有亮氏に『美術史』論文賞を贈り、その功績を称える。